

【研究背景】

私たちの社会では、「理想の身体」という概念が存在する。それは時代や文化圏で異なり、そこに従属する人も居ればしない人も居る。特に女性は、いろいろな場面で見られる対象にされることが多いため、その時代の理想像から外れるということのを恐れ、誰が決めたかわからない美の基準に従っている。そして無理なダイエットをしたり、高いお金を払ってエステに通ったりするのだ。本研究はそういった身体への固定観念に抵抗するファッションデザイナー川久保玲の思想に迫ろうとするものである。コム・デ・ギャルソンというブランドがある。デザイナー川久保玲は1981年のパリコレクションデビューから常に前衛的なクリエイションを見せ、世界的に高い評価をされ続けている。中でも1996年に発表された、1997年春夏コレクション「body meets dress, dress meets body」はそれまで発表してきたコレクションの中でも、特に賛否両論を呼び、新聞、雑誌、書籍、研究等メディアやアーティストの間で取り沙汰された。前衛振付家、故マース・カニングハムが自身の「シナリオ」の舞台に衣装として起用したことは有名である。各方面から反響を呼んだこのコレクションは「コブドレス」という異名を持つ。川久保はインタビューでコブドレスについて「新しい身体の形をデザインした。～（省）～固定観念にとらわれない美しい体のバランスがある。」と答えている。彼女の言う固定観念とはなんだったのか。この研究はあまり多くは語らない川久保の思想及び、身体とファッションの関係について考察することが目的である。

【方法】

基本的には、コブドレスやファッション及び身体に関する文献研究の域を超えない。

具体的にはコブドレスの報道や評論、パリコレクション報道や当時売っていた女性ファッション雑誌『JJ』、『non-no』の言説から当時の身体

に対する価値観を浮かび上がらせ、社会と切り離して考えることはできないファッション、身体について考察する。

コブドレス誕生とその社会背景について直接的に述べた先行研究はないが、コブドレスについて表象文化論的に述べた、平芳裕子著「抵抗する衣服、あるいは未熟な身体 コム・デ・ギャルソンのセクシュアリティ」を参考にした。またメディアの分析には、体系化はしていないが、小野原教子が著書「闘う衣服」においてロラン・バルトの「モードの体系」を引き、行った現在のファッション雑誌の「映像と言説の共同作業の再検討」を参考にした。

【考察】

コブドレスの報道、評論、そして当時の女性誌の言説からわかったことは、コレクション発表時、社会が身体に対し、いかにスレンダーか、いかにヒップ、バストが豊かかなど、コード化された美しさに価値を見出していたことだ。それに伴い、パリコレクションもそのコード化された美をどのようにして強調するかに尽力し、そこから逃れることが出来ずに、新しいクリエイションが生まれて来なかった。社会、そして、パリコレクションの停滞する様子を見て、川久保は怒り、危機感を抱いていたのである。そこで、川久保が出した答えは、コード化された身体美から、衣服を解放することである。それはコブによって、世間で美しいと言われるくびれを埋め、豊かなことが望まれるヒップと、華奢であることを良いとする肩を極端に肥大化させるなどの表現だった。コブドレスは一見皮肉めいた表現にばかり受け取られるが、造形的に見ても、独特の曲線、フォルムの美しさがあり、川久保の美的感覚に圧倒される。コブドレスを通して彼女が言いたかったことは、インタビューにもあったように、現在のコード化された美から、自分の美的価値観を解放し、新しい美の形を自ら発見することであった。